

[特集]

# STYLE MATTERS

スタイルの重要性。

「スタイルがすべての答え」

こう言い放ったのは、カルト的人気を誇る詩人のチャールズ・ブコウスキ。  
実にシンプル、そしてスケーターであれば無条件で共感するべき言葉。  
スケート、ファッション、生き方など、スタイルの形はさまざま。  
今回の巻頭特集では、5名のニューヨーカー、そして3名の日本人を通して  
必要不可欠なスタイルの重要性について考察する。

"Style is the answer to everything."

This is a quote by the late poet, Charles Bukowski.  
Something to be taken seriously if you're a skater.  
Skating, fashion, way to live life... style vary in form.  
In this feature article, we sat down with five New Yorkers and three Japanese  
to figure out what it means to have style and the importance of it.

ライアン・ジマーマン=写真 梶谷雅文=文  
photo:Ryan ZIMMERMAN text:Masafumi KAJITANI

2001年にアメリカ同時多発テロ事件によって倒壊したワールドトレードセンターからほど近いブロードウェイ/デイストリートにて。この街が育んだスタイルは数知れず。

# Bobby Puleo

[ボビー・プーリオ]

## 唯一無二のスケートフィロソファー。

この男ほど独特的なスケート哲学を構築してきたスケーターはいないだろう。

強い信念だけでなく、そのユニークなスケートスタイルでもリスペクトを集めてきた。

『PENAL CODE 100A』『5IVE FLAVORS』『INFMS』『LA LUZ』『STATIC II』などこれまでに残したビデオパートはすべて一切の妥協のない素晴らしいものばかり。

そんな彼の掲げる独自のスケート哲学、そして譲ることのできない美意識を紐解いていく。この男こそ、スケートコミュニティで最も興味深いスケーターと言っても過言ではない。

*Bobby Puleo is one of the most opinionated skaters in the skate community with a strong belief and distinct aesthetics.*

*We had a pleasure of sitting down with the man, someone I had respected for years since the '90s, and hear him talk about his skate philosophy that is worth listening to.*

独特の美意識と譲ることのできない独自のルール。誰よりも偏屈で、確固とした揺るぎないスケート哲学を持つことで知られるボビー・プーリオ。スケートに対するこだわりが異常に強いため、少々厄介な存在として位置づけられることがある重要人物。

そんなプーリオの取材を試みようということで、東京を発つ前に期待と不安を感じながら現地のフォトグラファーを通して本人に連絡をしてみる。すると「明るい時間はひとりでスケートをしている。だからスケートの話をして無駄にする時間はない。もしよければ一緒にスケートをして暗くなつてから話をしよう」との返信が。プーリオの貴重なライディングが撮れる可能性大ということでNYCへと飛び、取材を敢行することとなった。

取材日当日。クイーンズのアストリアで集合するという予定だったのだが、「新品のシューズを履き込まなければならぬから時間をくれ」、「散髪に行かなければならない」など、さまざまな理由でなかなか会うことができない。ようやく集合場所が

決まったのは辺りがすっかり暗くなつてから。そうして、プーリオに指定された自宅近くのカフェへと向かった。「待たせて悪かった。道端に放置されたクオーターパイプを見つけたから、それを解体して移動しようとしていたんだ。放っておいたらすぐには誰かに持っていくから。NYCはそんな街なんだよ」。これが半日、待ちぼうけをくらった理由だった。そもそも、彼の取材がスムースに進むなんて思ってはいない。これこそボビー・プーリオから受ける適切な扱い。あとは的外れの質問をして彼を怒らせないように注意するだけ。こんな感じでボビー・プーリオの取材は始まった。

「初めてNYCでスケートをしたのは'90年頃。NYの殺人率がピークに達したのが'91年だから、どこもかしこもジェントリフィケーションによって安全になった今とは比べ物にならないほど危険な時代だった。当時はまだ十代半ばだったけど、電車でシティに向かい、ブルックリンバンクスに通うようになった」とプーリオは自身のスケートライフのスタートを振り返る。



「誰よりも先に裏路地に隠れたスポットを探し出し  
誰もやっていないトリックを記録する」

アプローチもバンクの面もかなりラフ。タイトなバンクからぶつ飛びクリーンなオーリー。ストリートに点在する難解なテラインを見事攻略。  
1998年、ブルックリンにて。  
Photo by Mike O'Meally

その頃にフックアップされた初スポンサーがNimbus。当時、下降線を辿っていたShutの若手を吸収した、知る人ぞ知るNYエリアのスケートカンパニーだ。ライアン・ヒッキー、ピーター・フイン、ピーター・ビン、クリス・キーフなどNYを代表する鉢々たる面子を擁したが、2年ほどしてブランドが下火に。そして、スケートカンパニーとして立ち上がったZoo Yorkがそのほとんどのライダーを吸収することになった。つまり、ボビー・ブーリオはZoo YorkのOGメンバーでもあるということ。その後、ウエストコーストで発足したMetropolitanに加入し、その繋がりでStereoへ移籍するも、チームメイトだったイーサン・ファウラーとの不仲が原因でStereoをキックアウト。そして、Mad Circleによる伝説の『Let the Horns Blow』や『5ive Flavors』で素晴らしいパートを残し(FTC『Penal Code 100a』も忘れてはならない)、シンプルながらもスタイルッシュなスケーティングで躍世界の注目を集めるように。それからも悪名高きInfamousや『La Luz』、『Static II』で良質なスケーティングを披露し、enjoiやTrafficのライダーとしても活動。これがブーリオのざつとした経歴であるが、彼の最大の魅力は冒頭でも触れた独特のスケート哲学。

「さっきも言ったけど、NYCではすぐに物がなくなってしまう。この街は生存競争する場所なんだよ。誰も手を差し伸べてくれたりしない。何かが欲しければ自分で取りに行かなければならぬ街だ。そういう考え方方がオレのスケートに影響したんだと思う。スポットだって、そこに永遠にあるわけじゃない。周りと差別化するためにメンストリームの連中と違うことをしようと決めたのも現在のスタイルを形成した一因だ。そうして誰よりも先に裏路地に隠れたスポットを探し出し、誰もやっていないトリックを記録するようになったんだ」

’90年にブルックリンバンクスに向かう際に、ニュージャージーから電車でマンハッタンに到着して何ブロックもプッシュしたこと、ブーリオがスポットシークするようになったきっかけである。まだ見ぬ新しい景色を求めていろんな駅で下車し、目的地までのルートを毎回変更した。特に同時多発テロ事件以前のダントンはスケートできる空間が限られていたため、想像力を働かせて周りの環境を





重力に逆らう50-50でレールを上がる。このようにシンプルなトリックこそスタイルの重要性が問われる。1999年、NYCにて。  
Photo by Mike O'Malley



### 「良いスタイルとは誰かのクローンになることではない」

最大限に活かす必要があったと話す。それ以上のスポットを求めるのであれば、自分自身で動いて発見するしかない。こういったNYCの環境が、ブーリオのスケート哲学を育んでいった。

「そもそもスポットシーカーになろうと思ったわけじゃない。A地点からB地点にプッシュで移動する際に、スケート可能ないろんなものが目に入る。これは当たり前のことで。それを見落とすヤツは盲目だとか思えない。ちなみに、オレにとってはウォーリーをするような壁はスポットではない。最近、ウォーリーが流行っているけど、壁なんてそこら中にあるからね。探す必要なんてないじゃないか。オレが良質なスポットだと感じる要素は、テラインそのものではなく、それが空間として絵になるか、そして、それらテラインがどのような位置関係で配置されているかなんだ」

そして、このようなスケート哲学が深化されるにつれ、NYCやニュージャージーなど、基本的に自身のローカルエリアでしか撮影を行わないようになっていく。それは彼のビデオパートを観れば明らかであるが、ブーリオを語る上で欠かせないのは彼の持つ独特の美意識。

「スケートをする目的がプロになって金を稼ぎ、俗に言うキャリアを積むことなら、撮影してパートを残すことが必至だ。でもオレはがむしゃらに撮影するのではなく美意識に重きを置いてきた。これは個々の価値観でしかないかもしれないけど、アーティストと同じで自分の作品は美しくなければならない。自分自身が鑑賞したいと思えなければ駄作だ。だからこそ、オレは撮影の際に唯一無二のオブジェやスポットを探し出している。それなりの時間と労力が必要だけど、そこに美意識が表れるんだ。美的選択は極めて重要だということ。スポット、トリックセレクション、スポンサー。すべてが自分の美的選択に基づいているわけだから、絶対に妥協はできない。たとえば、'90年代のEMBでウォーリーなんかすれば、マイク・キャロルでもない限り大笑いされてキックアウトされていただろう。」

そういうことを判断できる美意識と美的選択がスケーターには必要なんだよ。何を選択するかで、そのスケーターの美意識がどのようなものか、何に影響を受けってきたのかがはっきりとわかる。ましてや誰から何をパクっているか一目瞭然だ。良いスタイルとは誰かのクローンに

### Bobby Puleo

ニュージャージー州出身、NYCクイーンズ在住。'90年代からNYCエリアを代表するスケーターとして活動し、独特なスケート哲学を基盤にしたスケーティングでカルト的人気を誇る。現在は自分が手がけるDIYセクションでひとりスキルを磨き独自の道を進んでいる。

なることではないんだ」

もうひとつ忘れてはならないのが、ブーリオが掲げる暗黙のルール。“スケートボードは自由”という風潮が世界中で広がっているが（もちろん楽しむことだけが目的なら自由だろう）、彼には上記の美意識に加えて決して譲れないルールが存在する。

「オレはユニークで真似のできないフットageをクリエイトしたいと思っている。そのためには誰よりも先に珍しいスポットを探し出さなければならない。往年のプールスケーターと同じだ。時間をかけて探し出したプールは誰でも滑っていいわけじゃない。やりたい放題やられたらシャットダウンされるからね。だから、どこの馬の骨かもわからないヤツが自分の探し出したスポットで好き勝手するのはルール違反なんだよ。これが理解できないヤツとは関わりたくないくらいだ。オレのスケーターとしてのビジネスを妨害しているわけだからね。

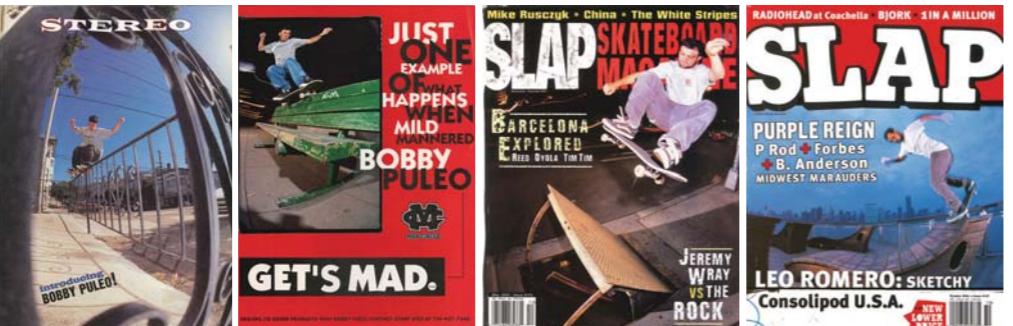
オーリーや50-50といったベーシックな



DIYのセクションを組み合わせてアーティスティックなバックサイドオーリーで浮遊する。9.11の悲惨な事件が起きる少し前の出来事。2001年、NYCにて。

Photo by Mike O'Malley

これまでのブーリオの露出の一部。左からStereo、Mad Circleのアド。続いて2000年代に飾ったSLAPのカバー。どの時代もブレることなくシンプルなスケートスタイルを貫いている。



## 「よその土地で用意されたスポットでトリックを撮るようなことはしたくない」

トリックしかしていないと言われることがあるけど、じゃあ“オマエはこのスポットを探し出して、スケートができる状態を持つていたのか?”と言いたい。スポットを探すのもトリックの一部だ。さらに言えば、オレが50-50ばかりしているのも、バージンスポットだからワックスが馴染んでいないし、アプローチに無数のクラックがあつたりするからそれしかできないからなんだよ。しかも5分でキックアウトされるような場所ばかりだ。そのような環境下でフットページを残すには、どうしてもベーシックトリックになってしまふ」

その集大成とも言えるのが、2013年にYouTubeの自身のアカウントで突然公開された“V5”パート。編集を繰り返したとこ

ろ、5回目のものが一番良かったということでこのタイトルになったのだという。一切のプロモーションを排除し、口コミだけでどれだけパートが広がるかを検証した実験的な試みでもあった。

「このパートはボードスポンサーがないために、スケートインダストリーからのサポートなしで制作したもの。スポンサーがなくともパートを制作するのは、それがオレにとってのアートだからだ。インダストリーからのサポートがあればもっといいパートができたかもしれないけど、オレの美意識を形にするにはこれが最適なやり方だったと思っている。企業の金でよその土地に行って、用意されたスポットでトリックを撮るようなことはしたくないからね。」

これはオレの美意識に反することだから” “V5”以来、基本的にブーリオは自身のインスタグラム(@timandvicstagram)でしかフットページを世に出していない。そこにはパンクやレッジなど、自分で作ったDIYパーク、自分だけの空間でひとり独自のスケートを追求する姿がある。そして、そこで身につけた新たなトリックを携え、手付かずのスポットで記録するという飽くなき活動を続けている。忘れた頃に彼のビデオパートが突如公開されるのを期待したいと思う。なにはともあれ、“スケートは自由だ！”という盲目的な風潮が広がる現代だからこそ、ボビー・ブーリオのような偏屈な存在が必要なのだとしみじみと感じる今日この頃だ。

# VICTIM BRAND

スケートで人生が狂わされた世界中の犠牲者に送る。

VICTIMとは“犠牲者”という意味。そんな言葉をブランドネームに採用するとはさすがは皮肉屋、ボビー・ブーリオ。これらは数年前にリリースされたアイテムだが彼の頭の中を覗くという意味で紹介させていただく。

[問い合わせ] SHELTER DISTRIBUTION phone:078-334-3505 / @shelter\_skate\_distribution



D.A.R.E Tee

価格:5184円

子どもたちをドラッグや暴力から守る教育をする団体が作ったTeeのパロディ。ここではドラッグはそのままに、暴力を犠牲者に変更。本来、このデザインは前面にプリントされるはずだったのはあまり知られていない話。

Future Bobby Puleo Pro Model

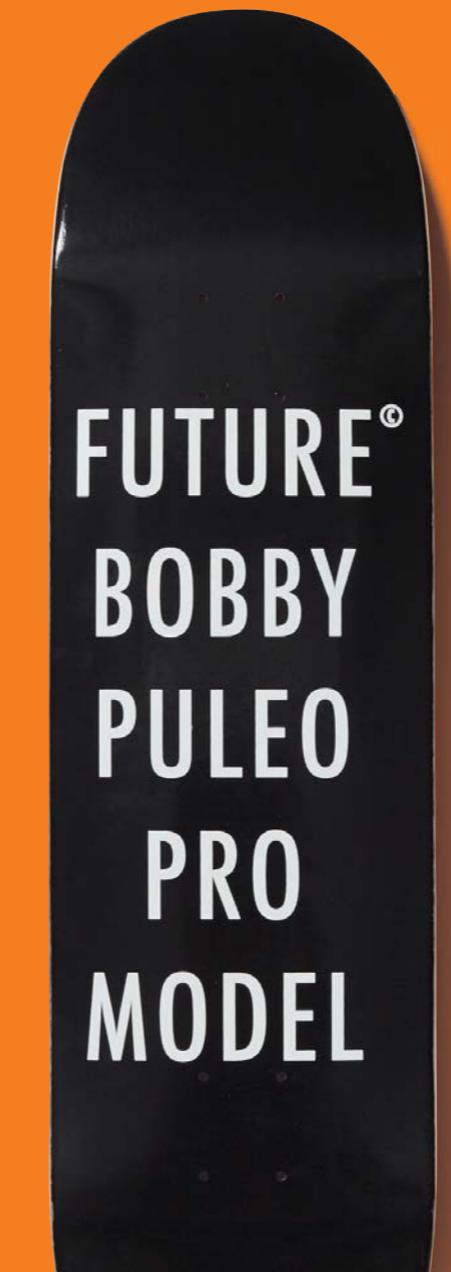
価格:1万800円

ここでも皮肉たっぷりに自虐ネタをボーダグラフィックに採用。現在、スケートで一銭も稼いでいるためにこのようなメッセージを使用したのだろうか。訳すと“ボビー・ブーリオの未来のプロモデル”。

Victim 2 Model

価格:1万800円

ハイ、こちらのグラフィックも犠牲者です。なぜここまで犠牲者に執着するのだろうか。ちなみにブーリオは陰謀説支持者であり、アメリカ同時多発テロはじめとするさまざまな事件の陰謀説を発信しています。



Victim 1 Model

価格:1万800円



このボードのグラフィックに採用されたのは、もちろん犠牲者。思い切り物にぶつかって転倒寸前……たしかにこの人は犠牲者です。みなさん、スケートをするときもししないときも犠牲者にならないように気をつけましょう。

# Alex Olson

〔アレックス・オルソン〕

スケートボードとファッショń。  
ふたつの世界で見せつけるスタイル。

端正なルックスに洗練されたセンス、そして世界最高峰のスキルと  
スケートスタイルを持ち合わせる男がスケートボードを通して  
アパレルブランドを立ち上げ、ハイファッショńにクロスオーバーさせた。  
そこからスケートブランドを発足し、スケートとファッショńという  
異なるフィールドで才能を発揮しながら活動を続けている。  
そんな稀有な存在、アレックス・オルソンにスタイルについて話を聞いてみた。

Needless to say, Alex Olson is a gifted skater who has created a brand through skateboarding and crossed over to high fashion, and launched a skate brand from it. Cultivating his path in the two worlds, the man embodies definition of style.





今年夏に突如オンライン公開された917初のフルレンジングビデオ『The 917 Video』から、アレックス・オルソンのスケーティングの数々。フロウとパワーを兼ね備えたスケーティングで多くのファンを魅了している。ちなみに本作ではヴィンセント・トゥゼリーとパートをシェアしている。

## 「スタイルとはソリッドでスムースな流れ。流れが止まってしまったらそこで終わりだ」

プロスケーターだけでなく、ファッショニモードとしても活動していたアレックス・オルソンがアパレルブランドのBianca Chandonを立ち上げたのが2013年。'70年代のサブカルチャーにインスピアイされたブランドとして高感度な層から高い評価を受け、現在ではスケートコミュニティだけでなくハイファッションからも注目を集めている。

「スケートブランドではなく、スケートにインスピアイされたブランドとしてBiancaを立ち上げたんだ。ちょうどGirlを辞めて3Dのオファーも実現しなかった頃の話。Biancaはオレのスケーティングで認知されたわけだけど、スケートをファッショニ利用するのはフェアじゃないと思った。だから、ある意味“コア”なスケートブランドとして917を立ち上げることにしたんだ」

917とはニューヨークの市外局番。NYCのストリートでスケートをしていると、こ

の番号のグラフィティが壁に描かれていてクールだと思ったこと、また友人のブランドであるaNYthingが電話番号をデザインに使用していたことにインスピアイされてブランドネームが決定した。

「これはランダムにピックした伝言ダイヤルの市外局番。310という選択肢もあったんだけど、917のほうがluckinessと響きがよかったということで917にしたんだ」

アレックスがピックした伝言ダイヤルはニューヨークの“917-692-2706”。ちなみに310とはアレックスの出身地であるロサンゼルスのもの。これは、これからNYCを拠点に活動していくという意志の現れでもあるだろう。実際にこの伝言ダイヤルに電話してみると、「メッセージをどうぞ」というオペレーターの声に続いている。そして、数え切れないキッズやファンがこの番号に連絡してメッセージを録音していく。往年のGirl

のフルレンジングビデオ『The 917 Video』のイントロで次々と流れる音声は、実にこの伝言ダイヤルに残されたファンからのメッセージの数々。電話番号をブランドネームに採用することでスケーターたちの好奇心をくすぐるというユニークなプロモーションが功を奏した。

「917立ち上げ当初はディラン・リーダーやジェイク・ジョンソンをチームに誘ったんだけど、オレのビジョンに賛同してくれなかつたということでうまくいかなかつた。だから知名度のあるスケーターを迎えるのは難しかつた。そこでいろいろと考えたんだ。もう辞めてしまったけど、かつて所属していたGirlの魅力は、基本的に他のカンパニーからプロを引き抜くというより無名のアマを育ててきたということ。だからオレもその姿勢を受け継ぎたいと思つた。無名の若いスケーターを迎えて、ライダー同士が本当にタイトな関係を築けるチームを作ろうと思ったんだ。往年のGirl

のようにね」

Bianca Chandonと917の運営でスケートだけに専念する時間が劇的に減ってしまったというが、アレックスのスタイルリッシュなスケーティングは健在だ。『The 917 Video』でもハイスピードでキレのあるフリップトリック、そして滑らかでフロウあふれるスケーティングを披露している。

「オレがスケーターに求めるスタイルは流れるような優雅なもの。広い視野でスケートを見られるようになった今はクリスチャン・ホソイの魅力がよくわかる。その一方で、トリックをメイクできるかすら予測できないような、異常なほどパワフルなスタイルにも惹かれる。だからオレにとってのスタイルはスムースとパワフルの極み。ジュリアン・ストレンジャーやマット・ロドリゲスのように何をしても流れれるよう自然なスケーターもスタイルを体現していると思う」

そして、スタイルの話はスケートの枠を飛び超えていく。

「音楽にしてもそう。いいスタイルの演奏は音が流れるようで途切れることがない。すべてがひとつにまとまっている。ファッションも同じだ。上から下まで途切れることがなく、流れるように洋服が馴染んでいる。スケートに限らず、スタイルとはソリッドでスムースな流れ。流れが止まってしまったらそこで終わりだ。アーティストでもミュージシャンでも、作品を見たり聴いたりすれば、そのタッチや旋律で誰が創作したかはつきりわかる。それがスタイルを持っているということだと思う。たとえば、キース・ヘリングの作品なんて最たる例だ。ジョン・フルシアンテ、ジミー・ヘンドリックスやジミー・ペイジ。一度聴けば彼らの演奏だとすぐにわかる。マーク・ゴンザレスが遙か遠くでプッシュしていてもすぐに誰だか識別できる。何をするにもスタイルが大切なんだ」

これこそ、アレックスがスケーターとしてずっと大切にしてきた美意識。現在は、「大変すぎてうんざり」だというBianca Chandonと917の運営に追われながら、数カ月前に痛めた足首の治療をしているところ。近いうちにまたアレックスのパワフルかつ繊細で、流れるようなスケーティングが拝めることだろう。ファッションはそれが何であれ、この男の活動すべての根底には素晴らしいスタイルが存在している。

### Alex Olson

カリフォルニア州サンタモニカ出身。ハイスピードでスタイルリッシュなスケーティングに定評のあるプロスケーター兼モデルであり、ハイファッションにクロスオーバーしたBianca Chandonとスケートブランドの917のディレクター。代表作は『Fully Flared』『cherry』『The 917 Video』など。



アレックスの取材はブルックリンの自宅近く、グリーンポイントのカフェで行われた。最近はジャズベースを練習しているとのことで、音楽を基礎から学んでいるとのこと。